



伊勢志摩サミット
三重県民会議

所蔵資料展示

伊勢志摩

平成二十八年五月十九日(木)～八月九日(火)

三重大学附属図書館

— ごあいさつ —

平成 28 年 5 月 26 日 27 日の二日間、G7 伊勢志摩サミットが志摩市賢島「志摩観光ホテル」で開催されます。G7 サミットとは、日、米、英、仏、独、伊、加 7 か国の首脳並びに欧州理事会議長及び欧州委員会委員長が参加して開催される首脳会議です。日本は今回で 6 回目の議長国となりますが、三重県でのサミット開催は初めてです。地球規模の様々な問題が話し合われ、議論の成果が報道されますが、また三重の美しい地勢も世界に伝わることと思います。

三重大学附属図書館は、G7 伊勢志摩サミットを記念して、旧志摩国つまり主に現在の鳥羽市・志摩市を中心とした資料 16 点を企画展示「伊勢志摩」として、公開することにいたしました。また館内に関連図書陳列棚を設けました。

「伊勢志摩」の名称が広まったのは、昭和 21 年に伊勢志摩国立公園が指定されたのが大きなきっかけです。鳥羽市、志摩市、度会郡南伊勢町、伊勢市が伊勢志摩国立公園に関係します。旧国郡制では伊勢と志摩は別の国です。しかし志摩はもともと伊勢から分かれたものであり、展示資料 5「和訓栞」や 14「志陽略志」が記すように江戸時代では「伊勢志摩（島）」と認識されてきました。

伊勢志摩国定公園全域を対象としたかったのですが、当館の展示スペースの関係で、伊勢市のうち神宮などに関わる展示は残念ながら見送りました。御了承ください。

それでは展示および関連図書を通じて、伊勢志摩の伝統と歴史を感じとっていただければと思います。

平成 28 年 5 月 三重大学附属図書館長 加納 哲

【展示凡例】

書名、読み（ひらがな）、ジャンル、刊・写、書型（サイズ）、巻冊数、編著者名、序跋者、刊行・成立年、版元（出版地）、旧所蔵元、架蔵番号、項目担当者名の順で記述。



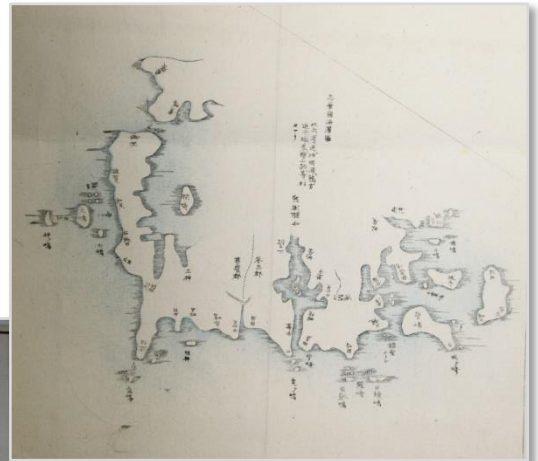
伊勢志摩について

志摩国は三重県中東部の旧国名で、もともと伊勢国の一部でしたが、平安時代には独立した一国となりました。もともと伊勢の一部だったためか、伊勢志摩ともいわれていました。奈良・平安は王朝が内陸にあったため、伊勢湾の美しい景色や漁人らの生活が驚きをもって歌に詠まれました。朝廷に海産物を献上した御食（みけ）つ国だといわれています。江戸時代では鳥羽藩領となり、海運の中継地としても重要な役割を果たしました。

1. 八国接壤図 はっこくせつじょうず

地図、刊、縦 121.0×横 106.3 糎、稲垣定毅著、塩田重華（随齋）序、稲垣寧跋、天保 5 年（1834）序跋、三重県師範学校旧蔵、092.59/H11。

稲垣定毅（いながきさだみ、1764-1835）は伊勢商人「納所屋」として活躍した稲垣家（津市八町）の五代目で、天文・暦算・地理学の学者でもあった。地図名は三河・尾張・美濃・近江・伊賀・大和・紀伊・志摩に接する伊勢の国図の意。原本群は津市図書館稲垣文庫にある。川北友成の序文や定毅自身の識語があるものもあり、定毅の地誌「伊勢志略」（未刊）に附して刊行する予定もあったようだ。結局定毅の長男で分家に養子に入った「之保」（名は寧）が、藩儒塩田重華の序を乞うて、天保 5 年に刊行したのが本地図。（吉丸雄哉）



2. 国郡全図 こくぐんぜんず

地誌、刊、縦 26.2×横 18.7 糎、大本、2 巻 2 冊(下巻欠)、青生東谿 著、文政 11 年(1828) 刊か、三重県師範学校旧蔵、291.038/A51。

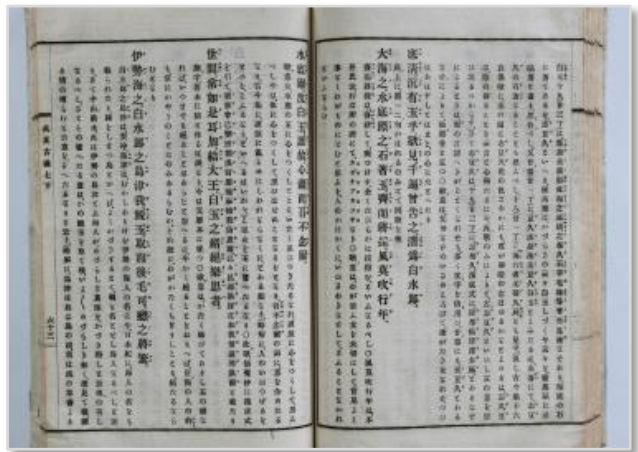
各国をそれぞれ一図に描き、それを 2 巻にまとめた国絵図集。上下左右と東西南北の対応は絵図によって違い、志摩国の場合は南が上になっている。伊勢志摩サミットの会場となる賢島は左のページの上のほうの右端、立神の上あたりにあるが、この絵図には描かれていない。このように実際の地形との違いも見られるものの、わかりやすいため重宝された。(稲本紀佳)



3. 万葉集古義 まんようしゅうこぎ

注釈、刊、縦 22.9×横 15.2 糎、20 巻 23 冊・付録 5 巻 8 冊、鹿持雅澄著、明治 31 年(1898) 刊、宮内省原本、(東京) 吉川半七発行、三重県師範学校、911.123/Ka41/1-31。

江戸後期に刊行された万葉集の注釈書で、本書は明治 31 年刊の活字本。万葉集には伊勢志摩を詠んだとされる歌が散見し、展示部分はそのうちの一首。1322「伊勢海之白水郎之島津我鰯玉取而後毛可戀之將繁」(伊勢の海の海人の島津が鰯玉採りて後もか恋の繁けむ)。鰯玉(真珠)は貝から取り出した後にこそ、その美しさに心惹かれるということを恋愛にたとえ、結

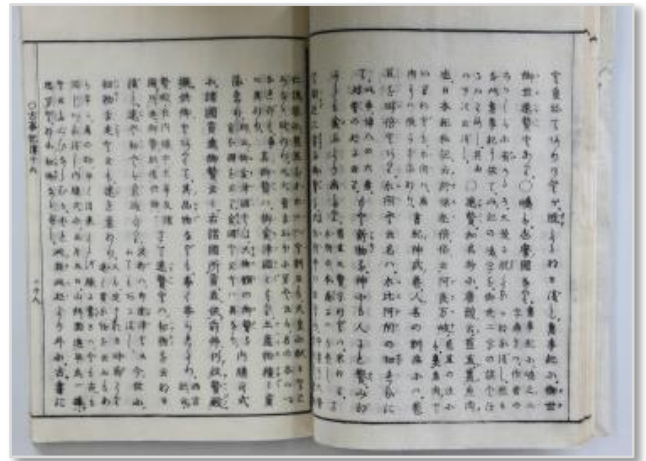


ばれた後も相手を想う気持ちが増していくさまを詠んだといわれる。「島津」を女性の名前だとする説と志摩国のことだとする説があり、本書では前者を提唱する。(稲本)

4. 古事記伝 こじきでん

注釈、刊、縦 25.9×横 18.1 糎、大本、44 巻 44 冊・目録 3 巻 3 冊 (210.3/Mo88/M-1-3)、本居宣長著、明治 8 年 (1875) 刊、(愛知) 片野東四郎蔵版、三重県師範学校旧蔵、210.3/Mo88/1-44。

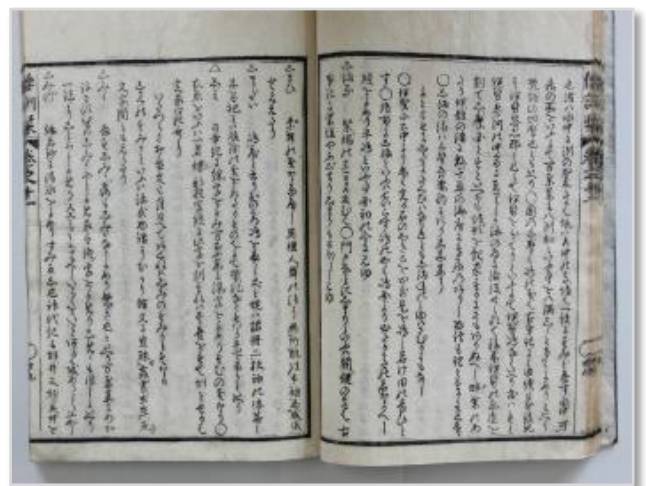
本居宣長による『古事記』全編の注釈書。初版は江戸時代後期だが、本書は明治 8 年の活字本。展示部分は古事記本文中の「嶋の速贄」という言葉の解説箇所。注釈に「嶋は志摩の国なり」とあるように、志摩国は古くは「嶋の国」であった。また、速贄とは初物の献上品のことで、ここから志摩国が朝廷や天皇に食物を献上する御食つ国（みけつくに）であったことがわかる。島が多く点在する国であったことと、その島々が生み出す豊富な海産物のイメージから「嶋の国」という国名が付けられたのではないかと思われる。(稲本)



5. 和訓栞 わくんのしおり

辞書、刊、縦 26.2×横 18.1 糎、大本、45 巻 34 冊(22 巻 14 冊欠)、谷川士清著、安永 6 年 (1777)・明治 20 年 (1887) 刊、(東都) 須原屋茂兵衛、(京師) 山本平左衛門、他 2 軒、三浦源助蔵版、三重県師範学校旧蔵、813.1/Ta88/A1-20。

「伊勢志摩」という言葉は伊勢志摩国定公園指定後に普及したようだが、実は古くから「伊勢島」という歌ことばがある。現在ではこの詞は伊勢国単体のことを示し「伊勢志摩」とは意味が違うと見る説が有力である。しかし江戸時代ではそうではなかった。本書は江戸時代に編まれた国語辞典で、展示部分は前編(1777 刊)「し之部」で、志摩国のことが三行目から記されており、志摩とは「嶋」の意味であるとする。「続日本後紀に伊勢答志郡と見へて伊勢を分てりといふにて伊勢嶋なといへり」という記述がある。『続日本後紀』にそのような記述は見られないのだが、土清の時代には伊勢国からわかれた志摩国を「伊勢嶋」と呼んでいたのは注目すべきである。(稲本)





志摩の産物

志摩は稲作には向いていませんでしたが、豊富な海産物で知られていました。海女漁から採れたアワビの加工や真珠の採集も有名でした。

6. 日本山海名産図会 にほんさんかいめいさんずえ

物産、刊、縦 26.1×横 18.2 糎 大本、5 巻 5 冊、法橋関月書画、寛政 11 年（1799）刊、（大坂）高木遷喬堂梓・（大坂）塩屋長兵衛版、三重県師範学校、602.1/N77/1-5。

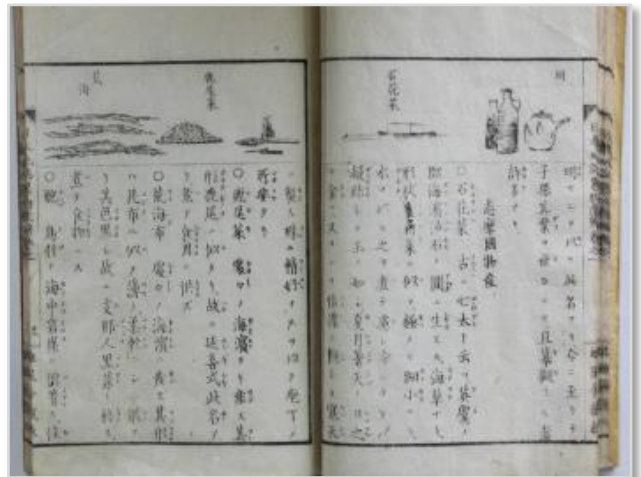
日本各地の名産品の特徴や採取・製造のようすをまとめたもの。文章での説明の他に見開きの図が付されている場合もある。展示部分は伊勢の名産品である、長鮑（のし）作りの風景を描いたもの。右側中央で採った鮑を左手前で薄く長く切り、それを左端のござの上に並べて干して作られる。長鮑は神への供物にもなるため、伊勢神宮があり「本朝の神都」である伊勢で生産されているのだと本書は述べている。（稲本）



7. 日本地誌略物産弁 にほんちしりやくぶっさんべん

地誌、刊、縦 22.3×横 15.1 糎、半紙本、2 巻 2 冊、榊原芳野訂正、床井弘・斎藤時恭補録、狩野良信画、明治 8 年（1875）刊、（東京）土方幸勝版、他 8 軒、三重県師範学校旧蔵、602.1/N77/1-2。

各地の名産品を国ごとに分けて絵入りで紹介したもの。編者が書籍や自分の目で見たもの、師範学校で様々な国の人と話すなかで知ったものなどを収録しているという。展示部分にはトコロテンやヒジキ、アラメ、アワビなどの志摩国の物産が掲載されている。他にボラやカツオが掲載されており、志摩国の漁業の盛んな様子がうかがえる。（稲本）





教育と志摩

現在の三重県は明治9年に成り、小学校では三重県の地理が教えられるようになりました。三重大学教育学部の前身にあたる三重県師範学校には、志摩地域からも多くの生徒が集まりました。

8. 郷土史三重県地誌教案 きょうどしみえけんちしきょうあん

教育、刊、縦22.5×横14.9 糎、半紙本、1冊、関西図書株式会社著作兼発行、明治33年(1900)刊、小寺庄三郎印刷、P/092.51/M。

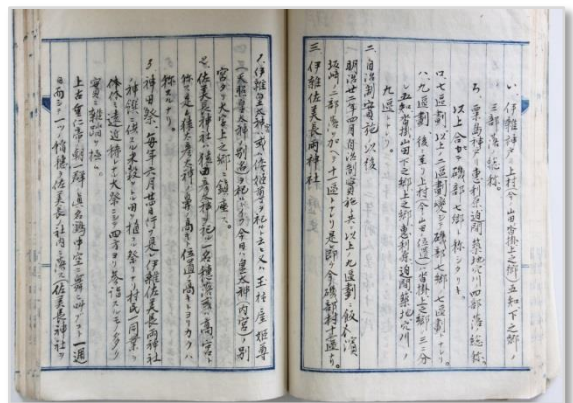
次に紹介する9『三重県郷土誌』を生徒に作らせるにあたっての教案。教案としているものの、ただ三重県各地の地理や産物、出身有名人などについて書かれているのみで、指導方法や授業目的については一切書かれていない。展示は志摩国について書かれている部分。ここで紹介されている近藤真琴は鳥羽出身の教育者で、新島襄や福沢諭吉らと並んで明治六大教育家と称された人物。東京の攻玉社中学・高等学校の創立者でもある。(稲本)



9. 三重県郷土誌 志摩郡、北牟婁郡、南牟婁郡 みえけんきょうどし しまぐん、きたむろぐん、みなみむろぐん

地誌、写、縦22.4×横15.5 糎、半紙本、43巻43冊(1冊欠本)、三重師範学校生徒著、三重県師範学校旧蔵。

本書は本学の前身である三重県師範学校の生徒たちが長期休暇の課題として取り組んだ、今でいう調べ学習の成果を製本したものの。生徒が各々の郷土について調べたことを手書きの地図と共にまとめている。内容については既存のものを書き写しただけのものも多いが、生徒手書きの一点ものという点で価値の高い史料といえる。展示は磯部村出身の生徒による調べ学習の一部とそれに添付された地図。伊雑宮神社と佐美長神社の縁起などが詳しく書かれている。寺社仏閣については他の生徒の郷土史でも詳しく述べられており、それによって本書の歴史的資料価値が高まっていると考えられている。附属図書館HP内三重県郷土誌データベースで全画像の閲覧が可能である。(稲本)



10. 三重県地誌略 みえけんちしりやく

地誌、刊、半紙本縦 22.2×横 15.3 糎、1 冊、御巫清生編、明治 11 年（1878）刊、（伊勢山田）御巫清生出版、（伊勢山田）加藤長平発兌、三重県師範学校旧蔵、P092/51/M。

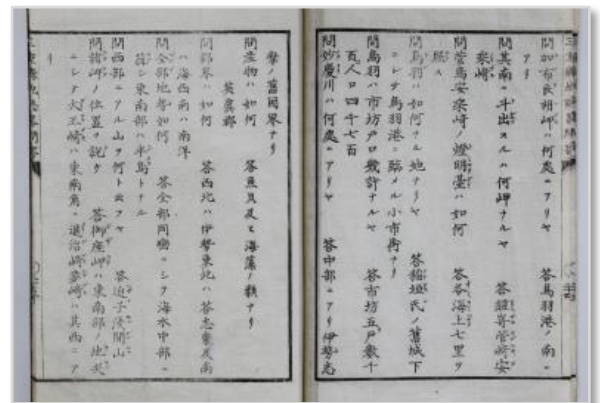
三重県地理の小学校用教科書。著者の御巫清生（みかなぎきよなお、1812-94）は本居春庭門の国学者であり、伊勢外宮神職。現在の三重県は明治 9 年（1876）に三重県と度会県が合併しており、それに対応した地理教科書。展示箇所は大王崎と志摩の地図。有名な大王崎灯台は昭和 2 年（1927）点灯のため図にない。（吉丸）



11. 三重県地誌略問答 みえけんちしりやくもんどう

地誌、刊、半紙本縦 22.3×横 14.6 糎、1 冊、御巫清生閱、生田告郎著、明治 12 年（1879）刊、（伊賀上野）廣田源蔵出版、（伊賀上野）豊住伊兵衛発兌、P092/51/L。

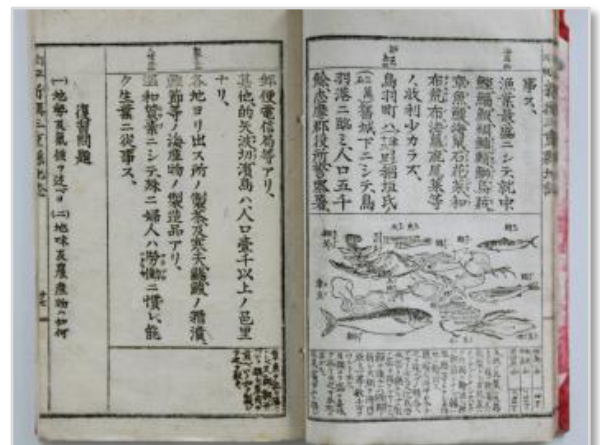
10『三重県地誌略』に対応した問題集。地勢、人口、産物、郡界、地名などを聞く。菅島灯台と安乗崎灯台はともに明治 6 年（1873）の点灯。ともに日本初のフレネル式レンズを用いて、遠くまで光が届いた。生田告郎は伊賀名張の士族で他に『地理初歩字弁』（1877）の著作がある。（吉丸）



12. 訂正三版新撰三重県地誌 ていせいさんはんしんせんみえけんちし

地誌、刊、半紙本縦 22.2×横 14.8 糎、1 冊、村上政太郎著、豊住謹次郎発行、明治 30 年（1897）刊、Ta29.1.97。

初版は明治 23 年刊。明治 23 年の小学校令に即した小学校用三重県地理を教える文部省検定教科書。伊勢国、伊賀国、志摩国、紀伊国牟婁郡などの地図を各国誌の前に挿れ、「地図上のしらべ」なる項目を設けて、生徒に予習させる点や、山川港湾などの名称の列記は生徒の記憶困難になるので避けて気候交通物産に関係のあるものだけ記した点に特徴がある。（吉丸）



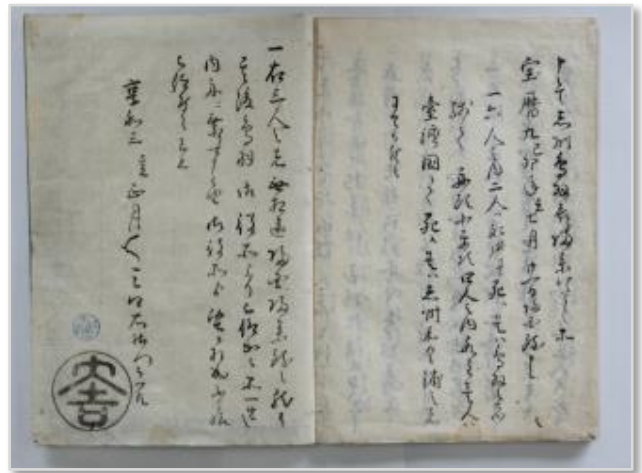
志摩と海運

江戸時代に鳥羽藩は海運の中継地としてにぎわいました。異国から漂流するものもあれば、遠くへ流されるものもありました。

13. 志州鳥羽船台湾国江吹流サレ物語 ししゅうとばせんたいわくこくへふきながされものがたり

漂流記、写、半紙本縦 22.8×横 16.1 糎、三四右衛門（本居大平か）写、享和 3 年（1803）写、中田政吉旧蔵、092.08/Sh91。

宝暦 7 年（1757）9 月 15 日に志摩国布施田村の船頭小平次以下 6 人が大王岬あたりで暴風にあつて吹き流され、約 150 日の漂流ののち台湾に漂着。それから福州、南京、上海、長崎を経て、生き残った 3 人が宝暦 9 年 7 月 21 日に帰ってきた経緯を記したもの。写本として流通し、名をかえて諸本ある。三重大本は享和 3 年三四右衛門の識語をもつ。三四右衛門は本居宣長の養子の太平か。旧蔵者の中田政吉は戦前に活躍した郷土史家で宇治山田の古書肆主人。昭和 32 年に本学に寄贈された。（吉丸）



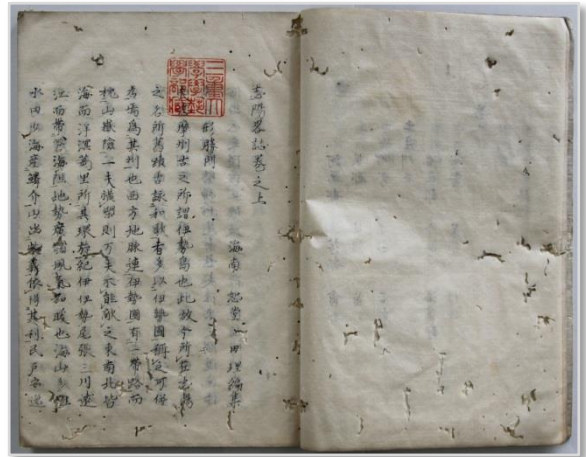
志摩と名勝

江戸時代には志摩一国を対象とした地誌が登場し、名所絵にも描かれるようになります。

14. 志陽略志 しょうりやくし

地誌、写、半紙本縦 27.2×横 18.8 糎、3 巻 1 冊、田理（葦田省甫）著、正徳 3 年（1713）自序、092.8/D57。

田理は板倉家時代の鳥羽藩儒者葦田省甫。形勝・郡名・村里・建置・沿革・城砦・神社・寺院・古蹟・土産・詠歌の部類があり、志摩国の本格的な地誌として最初のもの。訓点は書写者がつけたと思われる。三友齋埜邨利貞の序文のある本（大和文華館本や津市稲垣文庫本など）もあるが本書にはない。藩主板倉重治は宝永 7 年（1710）に伊勢亀山から国替えとなっており、本書編纂は藩政資料作成の目的があったと思われる。冒頭に志摩の古称が伊勢島であったと記す。（吉丸）



15. 諸国六十八景 しよこくろくじゅうはっけい

絵画、刊、大本縦 24.9×横 18.5 糎、1 冊、二代目歌川広重画、文久 2 年（1862）刊か、蕨吉版、三重県師範学校旧蔵、721.8/A47。

二代目歌川広重（1826-69）が出した名所絵「諸国六十八景」の絵本版。他には国立国会図書館と名古屋市蓬左文庫のみの伝存で貴重。国会版と綴じがことなるが、国会版は所有者が地名を優先して綴じなおしたものである。丁の表と裏に関連した地名が多いので（志摩の反対側が伊勢など）、変更は合理的であるが、もともとの構成では見開きでよく似た構図を配す箇所が多いように感じる。展示箇所は志摩の磯部嶺。「おうむ石」（志摩市磯部町恵利原）は幅 127m、高さ 31m のチャートの一枚岩で向かって声を発すると反響して戻ってくることで江戸時代から有名だった。（吉丸）



16. 志摩国鳥羽城絵図 しまこくとばじょうえず

絵図、写、縦 82.5×横 73.5 糎、1 枚、天保 9 年（1838）写、090.99/Sh37。

鳥羽藩五代藩主稲垣対馬守長剛から幕府に、鳥羽城の石垣の修復と堀の浚渫の許可申請をした際に提出した絵図の写。江戸期の鳥羽城を知る貴重な史料。皇學館大学研究開発推進センター史料編纂所所蔵の「志摩国鳥羽城絵図」とおそらく同じ書写者の手による原本の写しのひとつだと思われる。三重大の地図は落款が切り取られている。昭和 32 年に本学が購入したもの。（吉丸）



— 後 記 —

本展示の企画・制作は本図書館研究開発室兼務教員の人文学部吉丸雄哉准教授が行いました。解説・解題執筆は吉丸雄哉准教授と人文学部社会科学研究科大学院生稲本紀佳が行いました。展示品はすべて附属図書館の所蔵品です。

また地図の展示にあたって公益財団法人石水博物館にご協力いただきました。

■ 参考文献

- 中岡志州編『志摩国郷土史』中岡書店、昭和 51。092. 3. Sh35。
中岡志州編『鳥羽志摩新誌』中岡書店、昭和 45。092. 8. To13。
曾我部市太『鳥羽誌』富久館、明治 44。092. 8. So25。
井坂丹羽太郎『志摩国旧地考』三重県図書館協会、昭和 45。092. 8. Sh35 (明治 16 年版の復刻)。
岩田準一『志摩のはしりかね』中村幸昭発行、昭和 47。093. 82. 192。
津市図書館編『津市図書館蔵稲垣文庫仮目録』平成 13。
中川豊「稲垣定穀の転写本」(「中京大学図書館学紀要」32 号、平成 28)。
黒板勝美 国史大系編修会編『続日本後紀』吉川弘文館、昭和 58。
『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、平成 11。
三重県総合博物館 第 11 号企画展『伊勢志摩 常世の浪の重浪よする国へ、いざ NOW!』図録、
三重県総合博物館、平成 28 (2016) 4 月。

伊勢志摩 展示資料目録

発行 三重大学附属図書館

平成 28 年 5 月 19 日

この目録はインターネットからでもご覧になれます。

http://www.lib.mie-u.ac.jp/r_and_d/research/exhibit/iseshima.pdf